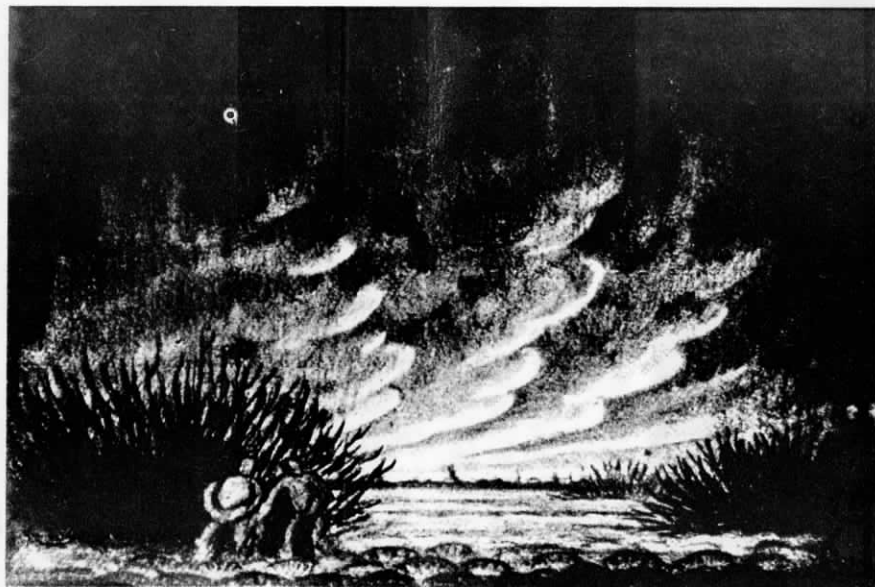


毎月一回15日発行昭和51年1月15日発行・第72号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

1月号



Libertaire VoL, VII. No. 2

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和51年1月15日発行 第72号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1976年1月15日発行 VoL, VII No. 2
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京133830番 三浦精一

目次

卷頭言 新年に寄せて	1
一つの回想	
— 新潟一般労働者組合の軌跡 —	
山口健助	2
価値と無償非交換経済	
奥山孝門	7
思い出す人びと(2)	
和田久太郎・村木源次郎君のこと	
安谷寛一	8
野火	
海外だより	10
	12

一九七六年の年が明けた。その日は晴天で道に霜柱が立ち、枯野の草の一筋一筋に塩を吹いたような氷の刃が付いている。鮮烈な朝だ。郊外の小さな林を貫く小径は落葉を敷いた絨毯で、つま先からさらさらと音をたてて崩れて行く。登ったばかりの太陽は熱気がなく硬質の光線を樹間に射し、遠い樹海と近くの田圃とを鮮やかな明暗(コントラスト)をつけて映しだしている。四方に人影はなく、時に中天をゆるがす風の流

れが樹の梢を抜けると、尾長と思われる鳥がけたましく鳴いて飛びあがる。

眼を転じてみよう。そこには赤茶けた台地がある。嘗ての美田を潰し残土をぶちまいて盛土をした宅地だ。それでも湧水がにじみでて三年以来放置された住宅供給公社の所有地である。春になれば田植をしていた田圃、秋には家族ぐるみ刈入れをして稲架の並んだ田圃、それがいまでは背の低い雑草の荒地として拡がり、遠くに黄色いブルートーザを一台置き忘れている。傍らを流れる小川も今では下水路になり、白い匂末をみれば洗剤の毒水かと驚き、小鮒やエビガニはおろか糸みみずさえ生棲の地を奪われてしまった。奪ったのは地域住民であり、恐らく私もその一人なのかも知れない。都市生活者が職場から一時間半かけて、静かな休息地を求めたためにこうした環境破壊に組みする次第になったのだろうか。だがひるがえっていえば自力でささやかな家をもとうとすれば郊外へ逃亡するしかなかったのも事実である。そこに売る人があったから買ったまでだ。との論理は人買いたいというのに売らない訳にはいかぬという死の商人の武器輸出の弁とどこが違っているのかと反省してみる、そして論理的には差異はないにしても死の商人のそれは売買のその先に人殺しの修羅地獄を現出する可能性がある故に絶対に容認できないとつぶやいてみる。だがまた考える：人間の情熱は限りがないものでその欲望の赴くままに振舞えばぶつかり逢うのは闘争であり、現実に血を流せば悪で、そうでなければ善だときめてかかるのは誤りではないのか、中国流に外交は血を流さない戦争で、戦争は血を流す外交だ！とすれば、平和こそ血を流さない戦争であり、戦争は血を流して贖う平和ではないか、そして現実には力が正義であり、正義こそ力でなければならぬのが人類の悲願だとブルードンが教えていた(戦争と平和)のを想えば、私に判るのは、終末の日もきつと四囲に人影がなく、天気は清朗にして今朝のような硬質の陽が地に降りそそいでいるだけだろうということである。(はしもと)

一つの回想

新潟一般労働者組合の軌跡

山口 健 助

種子は蒔かれた

これは地方におけるアナキズム運動の埋もれた歴史の一齣である。すでに四十年以上も経過しているが、こうした地方の動きが、また当時アナの潮流を支えた一つの軌跡であったともいえる。

共産党のOBを中心とする新潟県解放運動旧友会の機関誌「風雪越佐」(昭四九・三)に次のような回想が出ている。かつて日本共産党のオルグであった岩船省三が「新潟県労働組合運動の黎明期」として稿を寄せたものである。

「全協オルグが始めて新潟に派遣されてきたのは、成程昭和五年であったが、新潟県下の左翼労働運動はそれより数年早くから展開されていた。昭和二年には新潟市に於ては金属労働者と印刷労働者たちが、横七番町の知泉寺で発会式をあげて新潟一般労働者組合を結成した」とつたえている。

また、その脚註に「新潟一般労働者組合は鉄工の能登

(整三)小笠原(勘一)と印刷工の須藤(部)森田(小一郎)平沢(貞太郎)山口(健助)らが組織していた」と付記している(カッコ内は筆者)。

さらに板原晋太郎の「アナキスト小辞典」によると「新潟一般労働者組合は十数人」(昭三・警視庁特高課調べ)と推定している。これは過少な推定だが、僕の記憶によれば約四十人近い組合員を有していたと思う。

だが、このささやかな小グループの運動が当時十八歳多感な少年の僕にとつては記念すべきアナキズムの門出であったともいえる。

貧困な家庭に育った僕は小さな町工場を転々と歩き、文選工として低賃金と長時間労働に喘いでいた。それをアナキズムの道に開眼したのは森田小一郎であった。

森田は二十二歳、印刷工で東京帰りのちゃきちゃきの青年アナキストであり、すぐれたオルグでもあった。

三・一五の共産党事件後ボルに転向したが、彼の自宅はこうした青年分子のメッカであり、いつも何人かが集まっていた。

そこへ須藤が全国自連(全国労働組合自由連合会)の

オルグとして、森田の家に寄宿し理論指導に当たっていた。僕はこの経過を、「労働運動の思い出」として「県連」(新潟県労働組合連合会機関紙、昭二五・一〇)に次の如く連載している。

「この地に労働者解放の黒旗を――多感な青年の秘密グループが結成された。昭和元年の暮せまるころ、市内田中町の森田小一郎君宅で、須藤、平沢、丸山、森田および私の数名が夜を徹し社会主義の研究を続けた。連絡は県下に、東京にたたちにとられた。「黒色青年」「自由連合」等々の秘密機関紙、バクーニン、グロポトキン、幸徳秋水、石川三四郎、大杉栄の著書等々が主なテキストであった。

また、中国、朝鮮の革命文書も手に入れた中魚や南浦、刈羽の同志とも連絡がとれた。特に三条は自由思想発祥の地であり三宮(吉平)君を中心とする青年グループが早くより地下組織として結成されていた。

あけて昭和二年八月、私たちは第一回の県下の集まりを三条の某所で開き、運動方針を討議した。ところが早くも学生およびインテリ、農民を中心とする革命的な秘密組織とわれわれのような労働者グループとして、合法舞台を利用しようとする考えが対立した。

しかも、この会合が終わるや、当時苛烈な特高警察は

ただちに探知し、数名の同志は検挙された。もはや時日を選延するときではない。

秘密組織による独りよがりの運動にふけるときではない。速かに労働組合を結成し、公然と乗り出そう。これが数回の討議で決定実施され、九月早々新潟一般労働者組合が結成された。

旗上げから分裂へ

結成後の動向について、須藤部は「怒濤狂ふ裏日本に新潟一般生る――北陸における自由連合組合の先駆」(自由連合・昭二・一〇・五)と感激をもってレポートをおくっている。

十月十日に第一回協議会を開き、全国自連にただちに加盟することともに事務所を横七番町におき、須藤が常任として采配を揮っていた。

そして翌年一月一日、創立記念演説会を知泉寺において開催したが、元旦の夜にもかからず聴衆は四百名余を数え、警察の厳しい警戒裡に、弁士中止の連続であった。(自由連合、昭二・一二・一〇)

この誕生は半農半工の封建的な地方都市ではたしかにビックニュースであった。だが労働者の意識も低く、その組織化は容易なものでなかった。いわば新潟一般は危

険分子の集まりとして冷視されていたのだ。また商業新聞はこれに対しあられもないデマを飛ばし、特に「新潟時事新聞」は「九月に大杉栄虐殺を記念し、アナ系総決起か」とトップでデカデカと報道している。

ところがこうした地方都市でも労働者は常にクビ切りの危険にさらされ、賃金不払いや賃下げがひんびんと起き、労働者はいつも泣き寝入りしていた。

新潟一般の初陣の一つが「新潟朝日新聞」(従業員二〇数名)の争議である。ここは典型的な賃金不払いのゴロ新聞だ。須藤と僕が交渉に当たったが、二人は脅喝の容疑で新潟署にひっぱられた。一晚ブタ箱にぶちこまれ臭いメシを食ったが、僕にすればこれがいわば初体験だ。それから十年間、アナ系労働運動にたずさわり、数えきれないほど警察の門をくぐったが、臭いメシの味だけは忘れられない。

新潟朝日について、高見鉄工所のクビ切り、旭桜舎印刷の争議、山名鉄工所の賃金不払いなどが続き、生まれてからの組合にとってこれは大きな負担であった。

この小さな組合が全国的な松舞台にクローズアップされ、注目を集めたのは全国自連第二回統行大会(昭三・四・一七)の席上である。これがまたアナキズムとサンジカリズムに分裂し、アナ系運動の凋落に拍車をかけた原因の一つでもある。

た原因の一つでもある。

小松隆二は「全国労働組合自由連合会小史」(慶応大学産業研究所版)に大会の模様を次の如くつたえている。

「対立の火ぶたは、開会早々の新潟一般労組による須藤部の除名報告でまずきられた。やがて反サンジカリズム派として残留派の一人になる須藤の処置をめぐってサンジカリズム派と純正アナキズム派の対立の一端がはやくも表明化したものだ。」

しかし、須藤はすでに東京印刷工組合の代議員として出席していたので、新潟一般による除名は、須藤の大会出席資格に関係なく、除名を承認されることであった。それではなぜ須藤が新潟一般を除名されたか、理論的指導者として、自他共にこれを許していたにかかわらず彼の背信的行為が、他の指導分子のはげしい怒りを買ったのである。

須藤は常任として組合を指導してきたが、こんな小組合では彼の生活費を賄うことはできない。生活に困ったの窮余の策だろうが、全国大会出席に名を藉り突然姿をくらました。横七番町の事務所を独断で明け渡し、家主から引越料をとって上京したのである。

しかもそれに彼は東印に身を投ずるや思想的にも豹変し、純正アナキズムをふりかざし、サンジカリズム排

撃の先頭に立ったことである。

これが全国大会にとりあげられ、能登が新潟一般を代表して「須藤の非違をまず正せ」と、東京一般労組の江西一三、山本勘助らが強調し、擁護したが、サンジカリスト退治に熱をあげていた東印や黒連(黒色青年連盟)系は

「これは新潟一般内部の問題だ」

と、強引に押し切り、その陳弁を聞こうとしなかった。これに絶望した能登、小笠原らは戦線を離脱し、森田、丸山らはボルに馳った。思想的にも未熟な僕も動揺し、暗中摸索にゆれていた。

すでに組合は壊滅寸前の窮地に追い込まれた。しかし「ともかく組合を立て直さなければ」

と、残留した僕や平沢はその再建に細々とながら努力した。そして新しく新潟時事新聞の市川和平、後藤又吉、安宅哲、新潟活版の三島一郎、それに少数の製紙工や木材労働者を加えて陣容を立て直した。もちろんそれは一にぎりのものだが――

当時製紙工であったメンバーの渡辺副一は次のように回想している。

「秘密会合の場所にゆくまで夜道を山田にぐるぐる引きずりまわされた。その家につくと、四、五人のメンバ

ーが眼を光らせていた。私には初めての経験だが、なんとなくそそ怪しいものを感じた。」

再建から減滅まで

再建までの経過について「自由連合」(昭三・四・一〇)に次の如く報道されている。

◇臨時協議会(二月二日、於事務所)

一、組合の経済維持の件

組合員多数の意向により二月九日に決定すべく一時保留。

一、旭桜舎争議対策の件

◇臨時協議会(二月九日、於事務所)

一、組合の経済維持の件

市川君の応諾によつて一時事務所を同君宅に移転する。

一、事務担任者補欠の件

須藤君上京につき、後任を山口(健助)君に依頼。

一、定期集会日変更の件

一、組合員整理の件

イ、集會に出席せざる組合員に極力出席を促す事。

ロ、今後組合の内情を濫りにする者にその責を正し、反省を促すこと

(報告事項) 旭桜舎争議手当三週間分にて解決

◇臨時協議会（二月十二日、於早川町）

- 一、事務所移転は届け出でざる事
- 一、新潟朝日新聞社争議対策の件
- 一、定期集會変更の件

◇臨時協議会（二月十三日、於学校町）

- 一、新潟朝日新聞社争議対策の件

◇臨時協議会（二月十六日、於早川町）

（報告事項）新組合員紹介

- 一、東京印刷工組合大会について
- 一、沼垂木材労働組合切明しの件
- 一、須藤節放逐の件

彼は今まで同志を欺瞞し、隠へいたる数々の罪惡がバクロされ、その行為は自由連合主義を汚辱するものである故に、われらは放逐すべく可決

- 一、山口君進退に関する件

須藤の非行を黙過せし事を深く自責し、組合辞意を表したるも反省すればこれに止まるものと認め、即時復帰せしむべく可決

- 一、須藤放逐についての声明書頒布の件

◇定期例会（二月二十五日、於白山浦）

- 一、東印大会へ祝電送付の件
- 一、須藤節除名通知送付

能登君の手を通じ彼に突きつける事

- 一、声明書印刷の件

- 一、新潟朝日新聞社争議の件

一、和田久太郎君獄死について組合より弔辞送付の件
新潟一般の記録はこれをもって中絶している。声明書は僕が起草し、全国の無産団体に送付された。これと共に僕は中央における運動の実態を身をもって体得すべく六月上京、東印に身を投じた。もともと失業の身であったことも決意した理由の一つだが――

しかし、蒔かれた種子はむたにならない。新潟一般は二年そこそこで壊滅したか、その後起きた新潟時事新聞の争議は、市川、後藤、安宅、荒木らの残存分子によって指導された。

さらにその後三島一郎らを中心として新潟全産業労組として、息を吹きかえし、サンジカリスト派の日本自協（日本労働組合自由連合協議会）の一翼を形成し、裏日本におけるアナ系の燈を細々と維持してきた。

この事実は埋もれたアナキズム運動史に見落してならないものがあるだろう。